

種蒔く人

今橋 映子

東大比較文學會『比較文學研究』第107号、2022年1月、
pp.136-139.

芳賀徹先生は、二〇二〇年二月二十日にこの世を去られた。コロナ禍が世界規模の災厄へと広まる直前、それでもご葬儀に多くの方が集まることが出来たのは、不幸中の幸いであつたかもしれない。かつて何かの関西旅行で比較関係の数人がご一緒したとき、芳賀先生は、「あえてごだま」で帰ろう、と仰つて、小さなウイスキーのボトルやらビールやらを、ご機嫌で買ひ込んだ。人気の少ない車中の暢気な会話の合間に何を言い出すのかと思えば、「僕が死んだら、何人くらい葬式に来てくれるかなあ……」「あ、今日は授業だから無理だ」とか言つてあんまり来てくれないかなあ」などと仰るのである。それを軽口で鷹揚に受け流していた大澤吉博さんは、先生より先にあの世に旅立たれた。芳賀先生のご葬儀の日、その遺影を仰ぎながらそれをふと思ひ出し、遠く韓国からも弟子たちが参列した、心のこもつた追悼の時間を、先生は嬉しく受け取つて下さつたのではないかと、今改めて思う。

芳賀徹先生の御逝去に、東京大学大学院比較文化研究文化研究室を代表して改めて深く哀悼の意を表します。「東大比較」の歴史を振り返つて、島田謹二先生を仮に「第一世代」と呼べるなら、芳賀徹先生は間違いなく、平川祐弘先生と共に「第二世代」の旗頭だつた。研究室に残る記録によると、芳賀先生は一九八三年から一九八七年まで主任を務められ、その後の主任はすでに十名、三十年以上の時が流れている。一九九六年の大学院重点化という大改革を経て、比較研究室は大きな組織へと改編され、多様な専門家が集う、実質別の研究教育組織へと生まれ変わった。けれども比較文学、比較芸術、比較文化論を学ぼうと入学する大学院生にとつて、「東大比較」は今でも日本における主要な研究拠点の一つであることに違いはあるまい。芳賀先生たち第二世代は間違いなく、この「若く美しい学問」が、東京大学内のみならず、日本や世界で正當に認知されるための学術活動を、旺盛な著作は言うに及ばず、あらゆる側面で推し進めたと言える。研究室の歴史の末端に位置する者の一人として、その大きな学恩に、改めて深く感謝申し上げたいと思ひます。

ここからは私自身の感懐を綴ることをお許し頂きたい。私が比較研究室に入学したのは一九八五年。学習院で中学以来大学まで育つた私にとつて、「芳賀徹」とは、何よりも魅力的な著作の著者として鮮烈にあらわれた。とりわけ『絵画の領分——近代日本比較文化史研究』（朝日新聞社、一九八四年四月）は、『講座比較文学』全八巻（東京大学出版会、一九七三年六月—一九七六年三月）

と共に、大学仏文科四年生の私にとつて、外部の大学院受験を決意させた思い出の書物である。今思うと当時は、文字通り僭越にも「こういう研究ができるのであれば、比較文学という学問は良いかもしれない」と思つたのである。インターネットなど全く無い時代環境の中で、新しい学問の実態を知ることが容易ではなかつた。『講座比較文学』を手当たり次第に読んで、目指すべき遠い指標となるような論文を発見し、そして『絵画の領分』に、研究世界はこんなに自由で広いんだという感動を得た。今思えばまだまだ幼い感想に過ぎなかつたが、それでも大きな人生の決断をするのに十分な根拠が、そこにはあつた。

「比較」に入学し、芳賀先生の授業にも出て驚いたのは、緻密な実証と豊かな本文評釈を展開するその著述から想像される以上に、豪放磊落な先生の授業展開の仕方であつた。駒場八号館のあのゼミ室を覚えている方も多いであろう。大学院とは思えないほど、いつも四十人くらいぎっしりと集まる部屋で、O・B・O・Gの参加もある。先生の論理展開の甘さに食つてかかる先輩院生や、目も覚めるような口頭発表を事もなげにおこなう留学生など、自由闊達さに溢れ、驚きの連続だつた。芳賀先生のお得意は、そうした準備周到な発表に茶々を入れること——「つて言つたつて、やつぱり三島はたいした作家じゃないよ」とか、「そうか、そんなこと簡単に言えるか？」などというような、いわば雑駁かつ無責任な感想から、評釈の細部の誤解を指摘するような冴えきつた批評まで、これは他のどの授業でも（その前も、その先も）出会えなかつた授業方法である。雑駁な感

想が暴走し始めると、先輩たちのにやがやが止まらない。先生をよく知らない人々が急にそれを見聞きすれば、かなり危うい冗談にも聞こえただろう。授業というメディアだからこそ許された、そしてその「茶々」を上手く受け止められる若い世代との相互信頼があったからこそその展開だった、と今だからこそ分かる。

比較文学比較文化の先達として、大学院を率いていた芳賀徹先生の姿を永く留めようとするとき、私の中に浮かぶのは「種蒔く人」という言葉である。

比較文学比較文化という学問の徒は「広く深く」耕すべしと指し示したのは、何よりも先生の著作であることに異論はあるまい——幕末明治期外交官の西欧体験、絵画と文学、秋田蘭画や江戸時代博物学、ジャポニスム時代の日仏美術、平賀源内や渡辺華山、与謝蕪村や桃源郷の詩歌と絵画、東京や京都の都市論、日本近代詩歌や絵画の比較芸術論……厳密な本文評釈に裏付けられながらも、発想が自由に羽ばたき、かつその発想を豊かな日本語に結実させる稀有な才能が、多くの一般読者をも惹きつけてやまなかった。

そしてその著者が大学院の「教室」という場にいったん入ると、「種蒔く人」へとしばしば変身するのである。先生は著作の前段階として、教育者の姿で多くの種を蒔き、自分でもしばしばそこから芽を育て、作物へと成長させた。「権兵衛が種まきや、鳥がついばむ——つてやつだね」とよく笑っていた。『修論や博論の種なんか、売るほどあるね、みんなついばんでいくと

ちりばめていることに、次第に私は気づくことになった。

例えば同書の『三四郎』論の中、美禰子が三四郎と空の雲を眺めて、詩的な表現を繰り出している場面を捉え、芳賀先生はその註の中で(同書、三九三頁註11)、漱石がラスキンからそうした「雲についてのこのような新しい感受性とその表現とをつちかっただけではないか」と推定した上で、『枕草子』から司馬江漢国木田独歩、徳富蘆花、島崎藤村、志賀重昂、高橋由一や浅井忠などを次々と列挙し、「日本の文学と美術における雲の描写の変遷をたどってみることは、比較文化史研究の一章としてきわめて興味深いにちがいない」と書き記している。この「種」は修論テーマを色々と迷っていた私を誘惑し、様々に可能性を探ってみた——「まさに、雲を掴むような話だねえ」という、指導教官(川本皓嗣先生)の適切なまぜっかえしの一言が無ければ、大分迷っていたに違いない。やがて Hubert Damisch, *Theorie du nuage pour une histoire de la peinture* (Paris: Seuil, 1972) という書物が出ていることに自ら気づき、そうしたテーマ論を扱うには美学的な訓練が相当必要であることを学ぶことになったのであった。

あれから長い時間が経って、それでも、ある学問体系を継承するにあたって、感興と挑戦の意味を込めて、多くの種を蒔くことの重要性を、私は今噛みしめている。芳賀徹先生の、種蒔くときの、ちよつといたずらっ子のようなあの笑顔を思い出しながら——。

良いよ」と——。

そしてしばしば、ゼミ室の私たちの顔を眺めながら、手当たり次第に「あなたに似合う研究テーマ」の種を蒔こうとするのである。実は言ったご本人の方は、その場で忘れていくのである、と今では苦笑するような思い出だが、言われた方は忘れない。例えば私には何かの折で、クリストファー・ドレッサー Christopher Dresser (一八三四—一九〇四年)をやつたら良いと勧め、あるときは小川芋銭をぜひ、と主張された。何と言つても「大先生」の前で応答に困る若輩者であった訳だが、その「種まき」を鷹揚にかわす先輩たちのやりとりを見て、なるほど「聞く耳、聞かぬ耳」を持つ中で、自分が本当にやりたい方向もまた明確になるのだなあと会得したことも事実であった。しかし一方で、積極的に蒔かれた種を拾いに行こうとしたこともある。あの愛読していた『絵画の領分』である。周知のように、この著作は論文博士号を取得した広汎な仕事だけに、高橋由一、森鷗外と原田直次郎、黒田清輝、夏目漱石、高橋由一と岸田劉生、劉生から中村草田男に至るまで、ジャンルと時代を超えた壮大なスケールをもっている。芳賀徹という研究者は決して理論構築派というタイプではなかったが、この書物には、「絵画と文学」という領域横断的研究に関するあらゆる問題系が豊かに含まれている(芸術における「写実」の問題、明治大正期の美術批評、美術家と文学者の協働、小説の中の絵、画家小説、造本と装幀芸術など)。その上「種蒔く人」は、全く惜しむことなく、絵画と文学の領域横断研究の可能性を、つまり将来的な研究可能なテーマを、この書物のあちこちに、とりわけ長大な註の中に

編輯後記

◎ 重訳は、翻訳に深く関わる重要な現象であり、時として初訳よりも大きな意味を持つ。漢訳仏典の訓読を通じて形成されてきた日本の仏教も、重訳宗教と呼んだとて過言ではあるまい。

◎ 巻頭言は、編輯委員の間にちよつとした思い違いが生じ、もはや人選して依頼に及ぶ餘裕なし、特輯責任者の私が敢えて禿筆を揮うことになった。

◎ 菅原論文は、初期の荷風がゾラ作品の英訳から重訳を試みた事実を手堅く論述し、重訳が孕む基本的な問題を指摘する。

◎ 稲賀論文は、翻訳の諸問題から説き起こし、東西両洋を縦横無尽に駆け巡りながら重訳を論じる。「重訳研究序説」と称しても差し支えない一文であろう。

◎ 拙論は、漢文訓読の作業過程を「三重訳」と看做し、その実体の模式化を試みたもの。

◎ 張論文は、中村正直「訳」「西国立志編」の中国語版すなわち林萬里「重訳」「自助論」の時代背景と影響とを詳述する。

◎ それぞれ勤務先で要職にある多忙な三氏から興味深い論考を辱くした。特輯責任者として茲に満腔の謝意を表する。

◎ 本号では、初の試みとして特輯論文を公募した。活きの好い若手会員の投稿を期待してのことである。ただし、結果は、威令行われず、六十四歳の私が最年少と相成った。特輯論文を公募する方式そのものは、決して誤りでなかったと思うのだが。

◎ 前号では「上」のみの掲載に止まった井上論文と中村論文の「下」を本号に載録できたのは、悦ばしいかぎりである。

◎ 芳賀徹先生の追悼文等は、エリス俊子氏の統括のもとに編纂された。篇々として在りし日の芳賀先生を想わしめざるは無い。改めて学恩を噛みしめつつ味読して下さることを望む。

◎ 芳賀徹先生の著作目録は、徳盛誠氏の統括に係る文字どおりの労作である。遺漏あらば、後日の補充を期す。

◎ 衣笠正晃氏が英文の著作について周到な書評を寄せてくださった。厚く御礼を申し上げる。

◎ 紙幅の關係上、本誌の常例たる「展覧会・図録評」Le Rond-Point」は掲載できなかった。暫く御寛恕を請う。

◎ 杉田英明氏による編輯・校閲は、本号を以て終焉を迎えた。杉田氏の綿密きわまる校閲作業微りせば、本誌が今日に至るまで学術的水準の維持・向上を図ることはできなかったに違いない。長きにわたる多大な御尽力に対し、衷心より感謝を捧げる。

◎ 次号からは、新体制の編輯委員会が編輯作業を引き継ぐ。会員各位に倍旧の御協力をお願い申し上げる次第である。

(古田島洋介)

比較文學研究

第百七号

二〇二二年一月二十日

編輯 東大比較文學會

東京都目黒区駒場三二八一

東京大学大学院総合文化

研究科超域文化科学専攻

比較文學比較文化研究室

電話〇三五五四六三三〇

振替口座〇〇一七七一七六八

東大比較文學會

會長

菅原克也

編輯委員

杉田英明

エリス俊子

古田島洋介

今橋映子

徳盛誠

寺田寅彦

佐藤光

前島志保

堀江秀史

英文校閲 ジョン・ボチャラリ

発行所 株式会社すずさわ書店

埼玉県川越市東田町十五一五二一九

電話〇四九二九三六〇三二

ファクシミリ〇四九二四七三〇二二

振替口座〇〇三〇一九二八三五四

ISBN978-4-7954-0372-7 C3390

©Todai Hikaku-Bungaku-Kai 2022

Printed in Japan

比較文學研究

特輯 重 訳

- [巻頭言] 重訳管見——吾が疑念と体験……………古田島洋介(1)
- 重訳について——永井荷風のゾライズム期の訳業をめぐって……菅原 克也(8)
- 感情移入と気韻生動の周辺——発散と収束:重訳の重疊と
訳し戻しの逸脱とのあいだ……………稲賀 繁美(34)
- 漢文訓読の《三重訳》——標準模型構築の試み……………古田島洋介(52)
- 中国における『自助論』——その重訳をめぐっての緒論……………張 偉雄(69)
- ハードボイルド文学と1950年代日本
——男の声の翻訳とその反転の可能性をめぐって(下)……………井上 健(91)
- 植民地の文学少女——ジーン・リース『カルテット』(下)……………中村 和恵(107)

追悼 芳賀徹先生

- [弔辞と謝辞] 芳賀徹追悼の辞(平川祐弘)/父と若く美しく悦ばしき学問
——比較文学比較文化を言祝ぐ(芳賀満)/国際比較文学会のことな
ど(川本皓嗣)/芳賀徹先生を悼む(菅原克也)/種蒔く人(今橋映子)…(124)
- [思い出] 芳賀徹さんを偲ぶ(大島眞木)/けふはほろゝともなかね(加納孝
代)/「詩歌の森の人」(大嶋仁)/源内と桃源郷のあいだ(佐藤宗子)
/明るい日の記憶から(杉田英明)/先生を偲ぶ(佐々木英昭)/恩師
を送る(李応寿)/華やかな文化人(佐伯順子)/芳賀先生のこと(林
容澤)/娘に慕われた「お爺ちゃん」(張競)/芳賀先生の思い出(平石
典子)/芳賀徹先生(君野隆久)……………(139)
- [本文の解釈] 『みだれ髪』に寄せて(エリス俊子)/「ライデンの川
原慶賀」(山中由里子)/美術評論家としての芳賀徹——最後の電話
でのやり取りから(稲賀繁美)……………(165)
- [書評] 芳賀徹著『桃源の水脈——東アジア詩画の比較文化史』(上垣外
憲一)/芳賀徹著『外交官の文章——もう一つの近代日本比較文化
史』(松枝佳奈)……………(174)
- 芳賀徹先生著作目録
……………徳盛 誠・杉田英明・澁谷祐太・東崎悠乃共編(182)

[書 評]

- A Kamigata Anthology: Literature from Japan's Metropolitan Centers, 1600–1750* (Edited by Sumie Jones and Adam L. Kern with Kenji Watanabe)
/ An Edo Anthology: Literature from Japan's Mega-City, 1750–1850
(Edited by Sumie Jones with Kenji Watanabe) / *A Tokyo Anthology: Literature from Japan's Modern Metropolis, 1850–1920* (Edited by Sumie Jones with Charles Shiro Inoue)……………衣笠 正晃(220)

- 外国語要約……………(1)

107

東大比較文學會